

堀尾氏の出雲支配における支城について（2）

－赤名瀬戸山城－

中井 均

はじめに

堀尾氏の出雲支配においては、松江築城以後、元和元年（1615）の一国一城令までの間に、三刀屋城、赤名瀬戸山城、三沢城、月山富田城を支城としていたことを前稿で明らかにし、まず三刀屋城の紹介をおこなったところである（注1）。そこで今回は赤名瀬戸山城について分析をおこないたい。

1. 赤名瀬戸山城の位置と立地

赤名瀬戸山城は、島根県飯石郡飯南町下赤名に所在する。赤名は出雲の最南西端に位置しており、備後、石見の国境の地である。赤名瀬戸山城は赤名の町並みの背後にそびえる標高724.4mの武名ヶ平山より西に派生した標高631mの山頂に築かれている。城跡からは眼下に赤名の町並みを望むことができる。赤名は銀山街道と出雲街道（松江・広島街道）が交差する陰陽の交通の要衝であった。銀山街道は戦国時代に石見銀山で産出していた銀が日本海の温泉津を積出港としていたのに対し、関ヶ原合戦



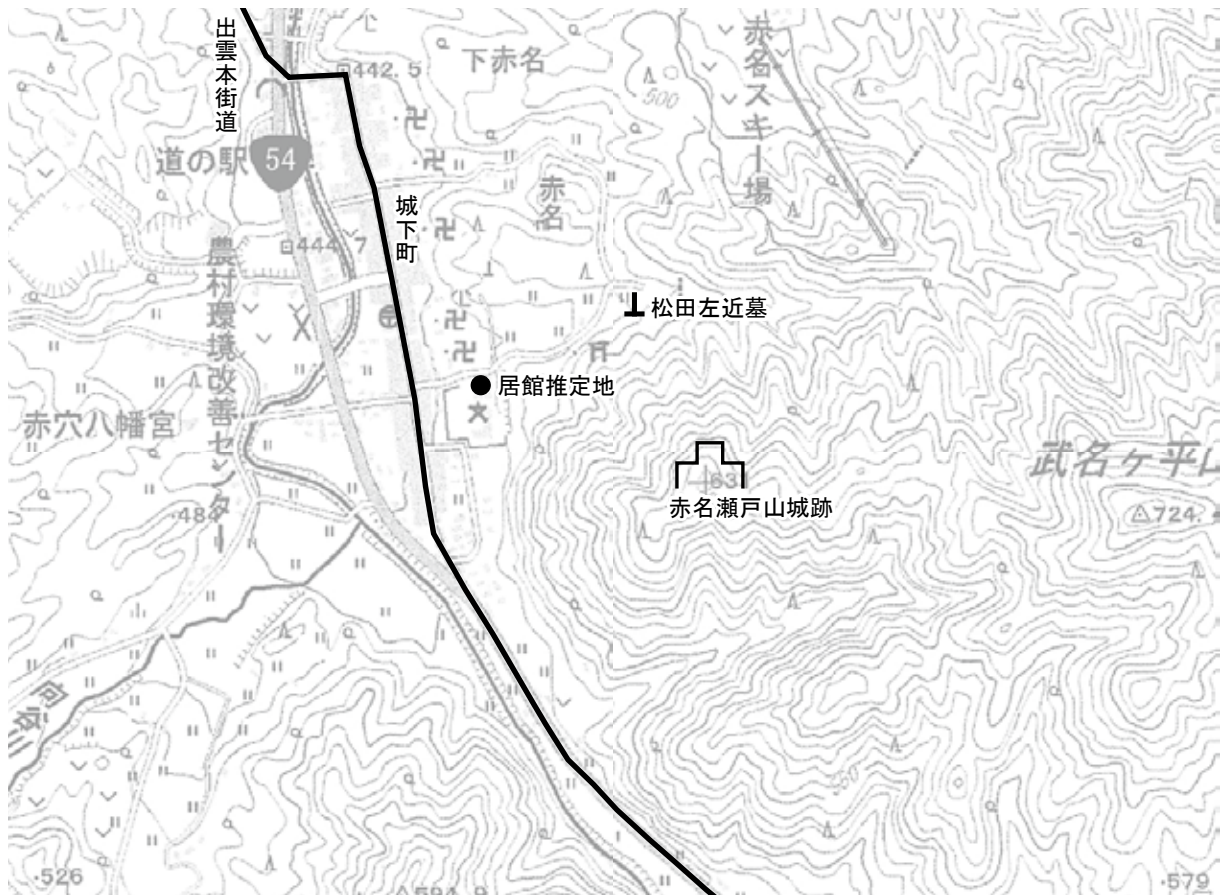
赤名瀬戸山城跡遠望

直後から徳川幕府が赤名峠を越えて三次を経由し、尾道に運ぶようになったルートである。しかし、この街道が江戸時代に開通したのではなく、すでに戦国時代にも用いられており、毛利、尼子両氏の抗争に利用されていたことは想像に難くない。関ヶ原合戦の戦功により備後には福島正則が入封しており、堀尾氏としては街道監視と国境警備の軍事的要衝として支城を配したものと考えられる。

2. 赤名瀬戸山城の歴史

前述したように、赤名は出雲、備後、石見の国境に位置していることより、戦国時代には尼子、毛利氏の抗争の場となっている。『赤来町史』によると、14世紀後半に佐波常連が赤穴庄の地頭に補されて赤穴氏を称し、赤名瀬戸山城を築いたと記している。もちろんこれを裏付ける史料はないが、戦国時代には赤穴氏の居城となっていることより、少なくとも赤名氏によって15世紀には築城されていたものと考えられる。この赤穴氏は尼子氏の傘下であったため、天文11年（1542）に周防の大内義隆、陶晴隆軍によって攻められている。また、永禄5年（1562）には月山富田城を攻めるため、毛利元就軍が備後より出雲に侵攻し、赤名瀬戸山城を攻めている。このとき赤名氏は毛利氏に降伏し、以後その傘下となっている。ただ、このときの攻城戦では一時期両軍が対峙していたようで、武名ヶ平山より赤名瀬戸山城に至る尾根線上に無数の削平地が瀬戸山城に向かって階段状に設けられており、これが毛利軍の築いた陣と考えられている。

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で西軍に与した毛利輝元は防長2ヶ国に減封され、赤名氏も萩へ移った。そして出雲に入国したのが堀尾吉晴、忠氏父子であった。赤名は国境であり、交通の要衝でもあることより、城番として松田左近、中山織部らが派遣された。松田左近は近江国甲賀郡出身と伝えられ、



第1図 赤名瀬戸山城跡位置図（1／25,000）

豊臣秀吉に仕え、後に堀尾吉晴の家臣となっている。左近の息子は吉晴の娘婿となり、堀尾因幡と称し、堀尾家の家老となっている。『松田氏系譜』には左近は吉久と名乗っており、「吉久賜石州阿加奈城領二万石」とも記されている。江戸時代に作成された家譜であり、史料価値は低いですが、松田左近の赤名城番は、単なる支城の城番ではなく、あるいは赤名周辺の地域支配をも任されていた可能性もある。

なお、城跡の北山麓谷筋に松田左近の墓と伝えられる五輪塔がある。また、城跡の西方に位置する大光寺には赤穴氏累代の墓所があり、中世の宝篋印塔が残されている。

3. 赤名瀬戸山城の構造

赤名の町並みから望む瀬戸山城の姿は圧巻で、山頂に築かれた石垣や曲輪を望むことができ、但馬竹田城を彷彿させる。戦国期最終期の石垣を用いた山城の姿は視覚的にも威圧感を与えたものであったことを感じさせてくれる。

さて、その赤名瀬戸山城の構造をここでは詳細に見ておきたい。赤名瀬戸山城は東西約400m、南北約200mを測る巨大な山城である。山頂部に構えられた主郭Ⅰは、東西約20m、南北約25mで不等辺五角形を呈する極めて小規模なものである。南辺に虎口を設けるが、北西端部に凹地が認められる。ただし、この凹地直下は切岸で、石垣も存在することよ



赤名瀬戸山城主郭Ⅰ

り、虎口とは考えられない。発掘調査が実施されていないので、この凹地が後世のものの可能性も考えなければならないが、赤名瀬戸山城時代の遺構であれば、穴蔵等の施設であったと考えられる。主郭Ⅰは極めて小規模であり、あるいは曲輪ではなく、Ⅰ自体が天守台であったことも考えられよう。この主郭Ⅰはすべて石垣によって築かれている。

主郭Ⅰの南側に一段低く構えられた曲輪Ⅱは、東西約15m、南北約20mを測る。このⅡ郭と、Ⅰ郭の間は約10m近い落差があり、石段が設けられているが、中間に小削平があり、Ⅰ郭の虎口に対する虎口受けと考えられる。Ⅰ郭を天守台と見るならば、この虎口受けは付櫓台に相当するものとなる。Ⅱ郭は西辺の北端に虎口を儲け、石段を付けてⅣ郭の帯曲輪と結んでいる。Ⅱ郭も石垣で築かれており、現在でも東面の切岸部に石垣の痕跡が認められる。



赤名瀬戸山城Ⅱ郭虎口

一方、Ⅰ郭の東側に一段低く、ほぼⅡ郭と同じ高さの尾根筋に曲輪Ⅲが東西約55m、南北約10～15mの規模で構えられている。曲輪の西端、Ⅰ郭の直下に虎口を設けている。この虎口は通路内を直角に折り曲げて直進を阻んでいる。こうした形状よりⅢ郭の虎口は赤名瀬戸山城では最も整えられた虎口であり、いわば大手に相当する虎口と考えられる。しかしこの虎口を入ると、Ⅲ郭からⅡ郭やⅠ郭に至る城道がなく、行き止まりとなってしまう。現在はⅢ郭とⅡ郭の間は通路が認められないが、これは破城の結果、城道部分が崩れてしまったものと考えられる。築城当初はⅢ郭の虎口より入り、Ⅱ郭に至り、そこからⅠ郭に登ったものと考えられる。Ⅲ郭も石垣によって築かれており、特に北面の切岸部にその痕跡が顕著に認められる。

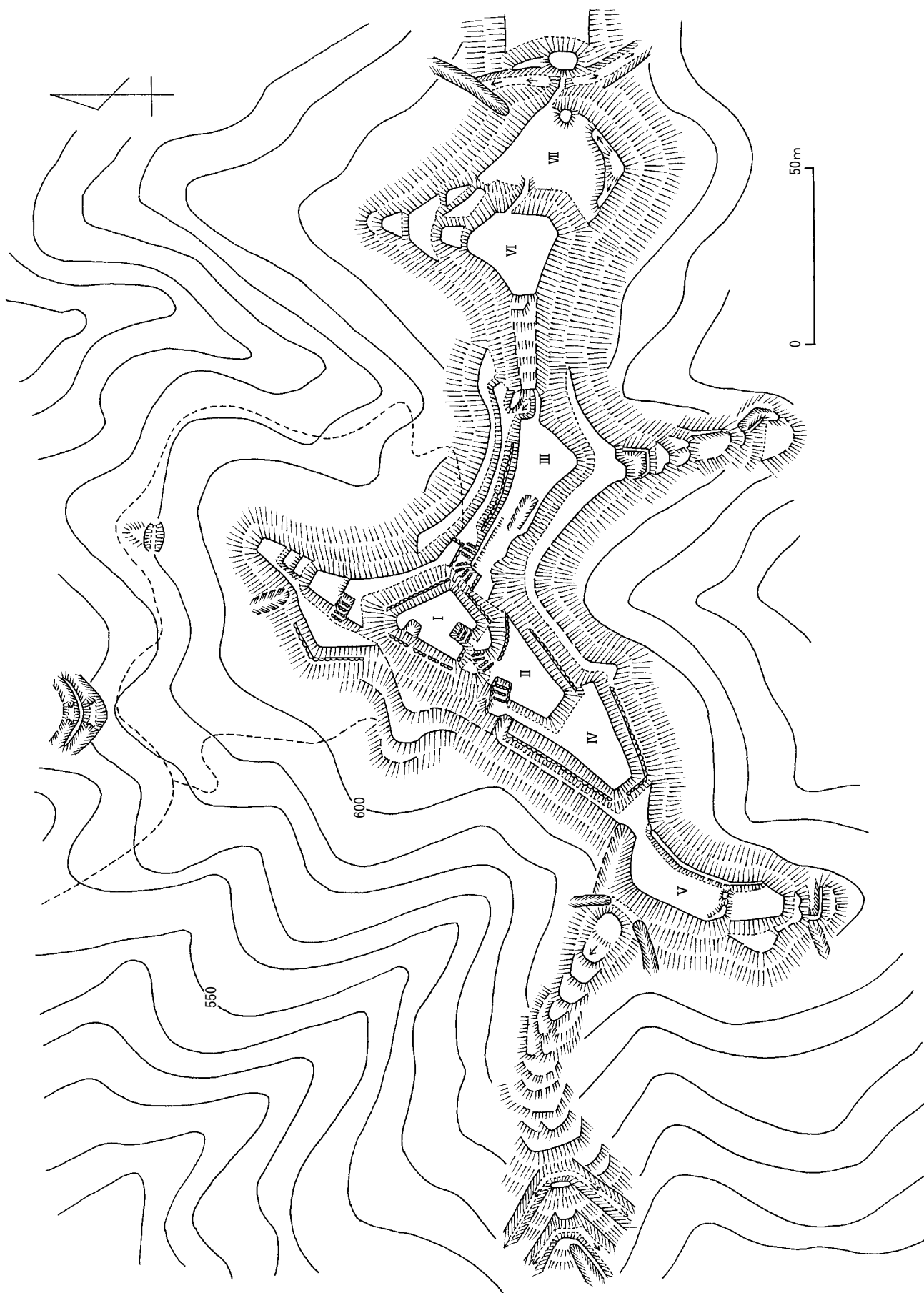


赤名瀬戸山城Ⅲ郭虎口

Ⅰ郭の北側には小規模な曲輪が数段にわたって築かれており、ここにも石段を用いた虎口が構えられており、山麓の居館とを結ぶ登城路が存在していたようである。

Ⅱ郭の南西側には一段低くⅣ郭が東西約15m、南北約25mの規模で築かれている。このⅣ郭も石垣で築かれており、西・南・東面の切岸部にその痕跡が認められる。北側は帯曲輪となってⅡ郭の西面直下に取り付き、Ⅱ郭と結んでいる。このⅣ郭のさらに南側に2段からなるⅤ郭が築かれている。Ⅰ～Ⅳ郭が石垣で築かれているのに対して、このⅤ郭では現在石垣の痕跡は認められない。Ⅴ郭は南側先端部と、西側の尾根筋に対して堀切を設けており、ここで城域を明確に遮断している。特に西側の尾根に対しては堀切の外側にさらに二重の堀切を設けて防御を固めている。

Ⅲ郭の東側にはⅠ郭とほぼ同じ高さで、曲輪Ⅵが構えられている。Ⅲ郭とⅥ郭の間は明確には加工されておらず、自然地形を残している。両曲輪間の鞍部には堀切状の溝が設けられているが、明確なものではなく、ややⅥ郭に対する処理が不明瞭である。Ⅵ郭は東西約25m、南北約25mを測るが、これまでの曲輪とは違い、矩形とはならず、自然地形に沿った削平地となっている。また、石垣も認められない。Ⅵ郭の東側にはⅦ郭が構えられているが、ここもⅥ郭と同じく自然地形に沿った削平となっている。このⅦ郭の東側には堀切を構えており、このⅦ郭で城域を明確に遮断している。



第2図 赤名瀬戸山城跡概要図（中井均作図）

ただ、この堀切を越えても東側尾根筋には延々と小規模な削平地が続くが、こうした遺構は堀尾氏時代のものではなく、永禄5年（1562）に武名ヶ平山に陣を構えた毛利元就軍に対して赤穴氏が築いた陣城に伴うものと考えられる。

このように赤名瀬戸山城はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ郭が石垣によって築かれており、これらの曲輪が中心的な曲輪であったことを示している。さらにその両翼に構えられたⅤ、Ⅵ、Ⅶ郭には石垣はないが、その外縁に堀切を設けていることより、支城段階に機能していた曲輪と考えてよいだろう。

4. 赤名瀬戸山城下の構造

赤名瀬戸山城の北西山麓には古い町並みが残されている。近世銀山街道と出雲街道（松江・広島街道）の宿場町である。しかしこの町並みの始まりは堀尾氏の支城時代に遡る。戦国時代の赤名の町は現在の古市にあったが、松田左近によって現在地へ移されたと伝えられている。その町並みは三本の通りから構成されており、最も城に近い東側の街路が武家地と寺院地となり、真ん中の街路が町屋となっていた。こうした城下町の形成からも赤名瀬戸山城は単なる国境警備の支城ではなく、松田氏が地域支配のために入れ置かれたことを示しているものと考えられる。

なお、松田氏の居館については城の西山麓、現在赤名小学校の建つ場所と考えられている。さらに小学校からの登城道沿いには現在も広大な削平地が数段認められ、家臣の屋敷跡と想定される。今回はこうした山麓の削平地を十分に調査できなかった。今後の課題としておきたい。

おわりに

さて、中心部に築かれた石垣に注目すると、その構築技法は打込接に属する積み方であるが、三刀屋城であれだけ用いられている矢穴が認められないのである（注2）。おそらく粗割りした石材ではあるが矢穴技法は用いられなかったようである。目視では赤名瀬戸山城の石垣石材はチャートが目立っており、三刀屋城との相違は時期差や工人差によるものではなく、石材の違いによるものではないだろうか。

なお、石垣はほぼ全域で崩れているが、これは元和の一国一城令による破城の結果であり、こうした城割行為からも赤名瀬戸山城が堀尾氏の支城として機能していたことがうかがえる。

虎口は通路内に石段を残す残存度抜群の遺構であるが、実は枡形とはならず、平虎口である。しかし、こうした平虎口を曲輪の端部に配置することにより、曲輪より横矢をかけるように工夫されている。

拙稿では堀尾氏の出雲支配における支城として赤名瀬戸山城について分析を試みた。石垣、虎口、曲輪配置などからⅠ郭からⅦ郭については堀尾氏によって築かれたものと考えた。大方のご批判を賜れば幸いである。



赤名瀬戸山城主郭Ⅰ石垣



赤名瀬戸山城Ⅳ郭石垣

追記

本稿執筆中に、寺井毅氏の「出雲入国時における堀尾氏の支城について」(2012.7『戦乱の空間』)に接した。この中で寺井氏は堀尾氏による支城として、1)堀尾氏が改修したことが明らかな城郭として、富田城、三刀屋城、瀬戸山城を挙げているほか、2)石垣の存在する城として、三沢城、夕景城、真山城、森山城、(富山要害山城)、(才坂要害山城)を、3)出雲地域では類例が極端に少ない縄張りの城として、金山要害山、玉造要害山、鳶ヶ巣城、賀田城、三木氏館、全隆寺城を、4)水路の存在する城として、三刀屋城、金山要害を、5)出雲ではよく見られる縄張で石垣も確認できないが、交通の要衝にある城として、横田城、多久和城、高平城、城戸城を報告しており、これらの大多数が堀尾氏によって改修された可能性が高いとしている。しかし、その根拠とされているのは、堀尾氏が関ヶ原合戦後に旧毛利領に入国したため、非常に軍事的緊張が高まっていたにもかかわらず、これまで支城とされてきた富田城(ただし、寺井論文では富田城は支城としてではなく、本拠として扱っている)、三刀屋城、瀬戸山城では、「堀尾氏領内の支城の少なさが際立っている」という点である。筆者も関ヶ原合戦後の軍事的緊張が全国の大名領国に支城を築く最大の原因となったことは同感であるが、こうした慶長期の支城には強い斉一性が貫徹されており、これを抜きに慶長期の本・支城体制は語れない。ただ数の多少という視点で出雲にこれだけの支城が築かれたとする寺井氏の説にはまったく賛同できない。むしろ寺井氏の挙げられた山城の大半は、尼子・毛利氏の抗争のなかで理解すべき山城だと考える。

(注1) 中井均「堀尾氏の出雲支配における支城について(1)―三刀屋尾崎城―」松江市教育委員会『松江城研究』第1号 2012

(注2) 筆者が調査した際には矢穴は発見できなかったが、後日西尾克己氏より、赤名瀬戸山城の石垣の石材にも矢穴が1点認められるとご教示を得た。さらにその石材はⅢ郭虎口の石垣に用いられていることを高屋茂男氏からご教示を得た。あるいはチャート以外の石材については矢穴で割っているのかも知れない。今後詳細に分布調査する必要がある。